

実施せらるゝ事となりたるにつき、四年生は卒業製作の為、展示会の諸事務を三年生に一任する事と内定。」とある。戦時体制強化による年限短縮や勤労働員は生徒の活動を著しく狭め、こうした校外活動を行いくくしていった。

なお、今回の展示会には前回同様の展示構成で百二十九点が出品され、左記のポスターが選定、献納された。

情報局へ

- |          |       |
|----------|-------|
| 1、防諜ポスター | 小島 勇  |
| 2、 "     | 太田 浪三 |
| 3、空の記念日  | 石山 彰  |
| 4、銅、鉄献納  | 加藤 元男 |
| 5、増産翼賛   | 李 榎泰  |
| 6、再起奉公   | 坂本健三郎 |
| 7、防空     | 小島 勇  |
| 8、 "     | 小島 康男 |
| 9、科学振興   | 小島 勇  |
| 10、銃後奉公  | 上原 政一 |
- 報道部へ
- |           |       |
|-----------|-------|
| 1、防諜ポスター  | 河 潤之介 |
| 2、 "      | 水島 秀男 |
| 3、小年航空兵募集 | 山県勇一郎 |
| 4、 "      | 松永 和夫 |
| 5、再起奉公    | 正木 直彦 |
| 6、 "      | 森地 正  |

7、防空

〃

浜田 照

⑫ 『クラシク』発行停止

校友会映画部の機関誌『クラシク』は昭和十三年十二月第四号まで発行されたが、同十四年一月の検挙事件に関連して発行停止となった。当時部員であった谷口広志(同十六年銚金部卒)は次のように記している。

だが、時代はひたひたと軍国主義の体制へと突入するケハイをみせはじめ、学校での軍事教練もいちだんと強化されていった。そのころぼくは、いかに生きるかで学生間に読<sup>「マ」</sup>れている『生活の探求』の著者である島木健作氏を、映画部として学校に招き座談会をひらいた「昭和十四年十月」。どのていど学生があつまるか不安だったが、満員の盛況で島木健作氏の根づよいファンがおおぜいいることを、あらためて認識させられた。また映画部会報「クラシク」には、進歩的な学生にも執筆してもらったが、それらの人たちが唯物論研究をしていたため何人かが検挙され、そのとばかりで「クラシク」は発行停止となった。映画部長の高村豊周先生(光太郎の弟)によれば叱られたことをおもいだす。

——一九四〇年三月、すなわち太平洋戦争勃発の一年まえにぼくは卒業し、大日本飛行協会に就職したのである。

『画文集——わが落穂ひろい——文化運動の軌跡』昭和五十六年、旭川文化団体協議会

右の「進歩的な学生」のなかに佐藤忠良氏（昭和十四年彫刻科卒）が居た。「美校時代を語るⅡ」（『杜』第五号。平成三年十二月、東京芸術大学美術学部同窓会）によると、氏は五、六人の仲間と或いはジツド、ヴァレリー、アランの著書、高村光太郎の『ロダンの言葉』などを讀んだり、或はロダンの弟子とかブールデルの弟子とかが来ると質問を試みたりし、いろいろな研究会を真面目にやっていたが、極く自然に社会主義や共産主義の国では芸術に対してどういう考え方をもっているのだろうかという疑問に行き当たり、文庫本の『唯物史観的芸術論』（正確な題は不明）を讀んだ。しかし、わからないことがいろいろあったため、代官山の同潤会アパートへ著者を訪ねて質問したりした。ところがその人が共産黨員だったらしく、大内兵衛らが逮捕された人民戦線の検挙の際に一緒に検挙され、氏ら本校生のことも明かすみに出て皆拘引された。氏自身は黨員でもなければ、そういうものに興味があったわけでもなかったが、卒業制作にとりかからねばならない十四年一月の十八日に練馬署に連行され、二月十八日まで拘留された。取り調べ中、唯物史観の書物について、「売っているのに読んで、何で悪いんですか？」と聞いたところ、刑事に「ひとりで読むのはいいけど、皆で読むのはいけない」と言われたという。また、思想が悪いからこういう絵が好きなんだと言われてモディリアニの画集まで取り上げられたという。

昭和十三年十一月、大学や専門学校の学生自治運動グループの検挙が開始され、学園から左傾活動が一掃されつつあった。佐藤氏らの左傾活動とも言えないような行動まで阻止され、しかも一カ月も拘留されるような時代が到来したのである。

### ⑬ 東京美術学校同窓会

昭和十四年三月十日、本校卒業生の組織である東京美術学校同窓会が設立された。「今次事變」下にありて全国各地方に遍在せる卒業者と母校との間に於ける連絡緊密を要望する聲は、日に月に昂まりつゝあるの状態に鑑み」（『発刊の辞』会長芝田徹心『東京美術学校同窓会会報』第一巻第一号。昭和十五年三月）で設立されたのであった。会長は本校校長、事務所は本校内に置かれ、印刷用紙入手困難の折りから、翌十五年に上記の会報が創刊された。僅か十六ページの冊子で、編輯兼発行人は鎌倉芳太郎。内容は上記芝田会長の「発刊の辞」、応召会員氏名（百七名）、戦死者報告（十一名）、戦地通信、会員移動、東京美術学校創立当時回顧録（一）、土橋醇一著「戦乱の巴里を逃れて」、同窓会記事（会則、会費納入者名簿）から構成されている。同窓会の活動は本誌一冊を刊行したことを除いて不明である。

### ⑭ 教育振作

昭和十二年の日中戦争開始以後、臨戦体制確立の必要から国家総動員法が公布（翌十三年四月）され、また、文部省には教学局（同十二年七月設置）と教育審議会（同年十二月）が置かれ、思想、文化、教育の全面的統制が実施され始めた。これと関連して同十四年五月に本校は教育振作の具体的方策に関する報告書の提出を求められたが、その報告書の控えが現存するので、左に掲載する（一）は文部省の質問条項）。